日本遺産の町　明和町　「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」

一．わが背子を　大和へ遣ると　さ夜ふけて　暁露に　我が立ち濡れし　大伯皇女『万葉集』

あの方（わが弟の君）を大和へ帰しやるとて、見送って佇んでいると夜が更けて明けがたの露に、私は濡れてしまったことでした。

二．二人行けど　行き過ぎ難き　秋山を　いかにか君が　獨り越ゆらむ　大伯皇女『万葉集』

二人で行っても、もの寂しく行き過ぎがたい秋の山を、今頃はどのようにして弟は、ただ一人で越えていることであろうか。

三．君やこし　我や行きけむ　おもほえず　夢か現か　ねてか醒めてか　恬子内親王『伊勢物語』

あなたがいらっしゃったのか、それともわたくしが参りましたのか、なんとも分かりません。夢の中のことなのでしょうか、現実に起こったことなのでしょうか。又、寝ている折のことでしょうか、目覚めているうちのことでしょうか…。

四．かきくらす　心の闇に　まどひにき　夢うつつとは　こよひさだめよ　在原業平『伊勢物語』

人の思いをかき乱すように暗くする心の闇にすっかり混乱いたしました。あの逢う瀬が夢なのか現実なのかは、今晩おいでになってお決めください。

五．くれたけの　よよの宮こと　きくからに　きみはちとせの　うたがひもなし　藤原兼輔『大和物語』

ところの名も代々に栄える多気の斎宮と聞くにつけましても、常緑の竹になって、宮さまが千年の長寿をたもたれることは疑いもありません。

六．伊勢の海の　ちひろのはまに　ひろふとも　今は何てふ　かひかあるべき　藤原敦忠『後撰和歌集』

伊勢の海の千尋もある長い浜辺で、たとえ貝を拾ったにしても、貴方が伊勢の斎王にお決まりになった今では、何の甲斐もない事です。もういくらお慕いしても叶わぬものと悲しんでいます。

七．伊勢のうみに　ふねを流して　しほたるる　あまをわがみと　なりぬべきかな　藤原敦忠『敦忠集』

伊勢の海で船を流して悲嘆に沈む蜑の身の上と同じように、涙に濡れる我が身となってしまいそうだなあ。

八．いせのうみの　あまのあまたに　なりぬらむ　われもおとらず　しほをたるれば　雅子内親王『敦忠集』

伊勢の海の涙に沈む蜑もさぞ多くなった事でしょう。その蜑に劣らず私も悲嘆にくれているのですが。

九．世にふれば　又もこえけり　すずか山　昔の今に　なるにやあるらん　徽子女王『拾遺和歌集』

この世に生きながらえていた故に、またまたこの鈴鹿の山を越えて伊勢へ赴くことになったことです。昔、伊勢へ下った時の事が、まざまざと今に重なってゆくようですよ。

一〇．すずか山　しづのをだまき　もろともに　ふるにはまさる　ことなかりけり　規子内親王『斎宮女御集』

鈴鹿山を越えるにあたって、昔を今になしていられる母上様、本当に御一緒できるにこしたことはございませんわ。

十一．おほよどの　浦に立つ波　かへらずは　松のかはらぬ　色をみましや　徽子女王『新古今和歌集』

大淀の浦に立つ波が寄せては返すように、私がこの伊勢に帰って来なかったならば、この松の常に変わらない色を再び見ることができたでしょうか。

十二．おほよどの　みそぎいくよに　なりぬらん　神さびにたる　うらのひめ松　源兼澄『拾遺和歌集』

大淀の浦で神事のたびに、みそぎが行われたのは、もうどれ程の年代になったことだろう。浦の姫松までも神々しく感じられる。

十三．をる人も　なきやまざとに　はなのみぞ　むかしの春を　わすれざりける　徽子女王『斎宮女御集』

花が咲いても、それを手折って賞美する人もいない山里に、花だけは昔通りに春を忘れずに、きれいに咲いていることであるよ。

十四．春さめと　みるはしぐれか　おぼつかな　かすみをわけて　ちれるもみぢは　徽子女王『斎宮女御集』

春雨とみえるこの雨は、しぐれなのかしら、いぶかしいこと。霞をわけて散ってきた紅葉なんて。

十五．おほよどに　よものうらがひ　ひろひても　ちひろばかりの　あやめをぞひく　よみ人しらず『斎宮貝合』

大淀の浦のあちらこちらの貝を拾うにつけても、今日、五月五日は思う事の成就を祈るという長い根のあやめを引くことです。

歴史の道　「歌碑」

十六．いかにせん　今日　おほよどのはまにきて　あやめやひかむ　かひやひろはむ　よみ人しらず『斎宮貝合』

さあ、どうしましょう。五月五日の今日、大淀の浜に来て、菖蒲をひこうかしら。それとも貝を拾おうかしら。

十七．わかれゆく　都のかたの　恋しきに　いざむすびみむ　忘井の水　斎宮甲妻『千載和歌集』

斎王の群行に加わり、京の都に別れて行きますが、都の方が恋しくてなりません。「忘井の水」を飲めばきっと都のことを忘れるかもしれません。さあ「忘井の水」を手で掬って飲みましょう。

十八．ときはなる　竹の都の　石なれば　うれしきふしを　かぞへてぞやる　源俊頼『散木奇歌集』

永久に変わることのない斎宮の宮殿の石であるので、うれしく「いしなどり」遊びに合わせ、石を数えて、いしなどりをやったことである。

十九．いつかまた　いつきの宮の　いつかれて　しめのみうちに　ちりをはらはん　西行『山家集』

何時になったら、また斎王が潔斎をなさって、注連がめぐらされた御内に、塵を払ってお仕えになることだろうか。

二〇．うゑおきて　花の宮こへ　かへりなば　こひしかるべき　女郎花かな　粛子内親王『新続古今和歌集』

私が女郎花を植えて置いて都へ帰ったならば、この女郎花はどのように綺麗に咲いているだろうか、また誰かになびいて他人のものとなっておりはしないかと、きっと恋しくなるにちがいありません。

二一．雪にだに　跡まつかたぞ　なかりける　あだにもこえぬ　神のいがきは　奨子内親王『続千載和歌集』

一面に降る雪でさえ、その中に跡をつける方法はなかったのです。かりそめにも神の斎垣は越えてはならないものなのです。

二二．すずか川　やそせの波は　わけもせで　わたらぬ袖の　ぬるる比かな　奨子内親王『玉葉和歌集』

鈴鹿川の多くの瀬の波を分けてゆくこともせず、川を渡りもしない袖なのに涙に濡れるこの頃なのです。

二三．わすれめや　神のいがきの　榊葉に　ゆふかけそへし　雪の曙　祥子内親王『新葉和歌集』

どうして忘れる事が出来ましょう。神の斎垣の榊葉に木綿をかけそえたあの雪の降った曙の神々しさを。

二四．いすず川　たのむ心は　にごらぬを　などわたるせの　猶よどむらん　祥子内親王『新葉和歌集』

五十鈴川のように私のたのみにする心は邪心もなく清いものですのに、どうして渡る瀬（世の中）はこのように、よどんですっきりしないのでしょう。

歌碑は明和町の町制 50 周年・史跡斎宮跡の指定 30 周年を記念して、平成 20 年度に設置されました。